《書　評》

有薗正一郎著『近世農書の地理学的研究』

野　間　晴　雄*

1

わが国の近世農書を研究資料とすることは，これまでも農業技術史・近世史・民俗学などの分野で数多くなされてきた。しかし，これを研究の真正面にすえたのは，古島敏雄氏の戦中期の著作である『日本農学史　第一巻』『近世日本農業の構造』『日本農業技術史』などが，本格的なものとしては最初であろう。有薗氏の『近世農書の地理学的研究』を，これに続く近世農書の本格的な研究として位置づけることにはおそらく異存はあるまい。

有薗氏は，昭和51年に立命館大学の博士課程を単位修得された新進気鋭の地理学研究者で，大学院時代までは，現代農業の土地利用や，明治期以降の県や市町村を単位とした農作物の作付変化の地域性，換言すれば近代の農業的土地利用変化をテーマとされてきた。それが昭和52年，突如として，わが国最古の農書といわれる『清良記』巻七の分析を発表された。その当時，蒲原平野の開拓の歴史地理をテーマとして修士論文を模索していた評者には，わが意を得たような斬新な地理学会への有薗氏の登場であったことが，いまも記憶に新しい。これを契機として，全国の近世農書を渉猟され，またその農書の書かれた地域の精査を重ねられてまとめられたのが本書である。現代農業の研究から一転して近世農書への沈潜は，「農業は経済行為であると同時に，一定の広さとまとまりをもつ地域において，過去に存在した生産様式の蓄積でもあって，一つの

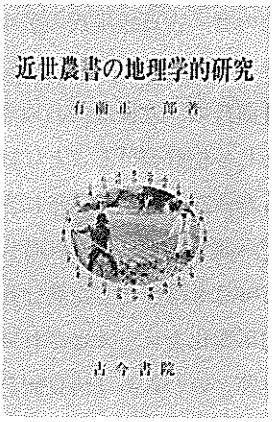
＊のま　はるお　滋賀大学教育学部

文化として位置づけて，始めてその理解が可能になることにあらためて気づいた」という（45ページ）。

昭和49年からは，農業史研究者が避けては通れないと思われる上にあげた古島氏の初期の古典的名著が著作集として復刻され，52年には堅い出版物としては意外なヒットとなって話題となった『日本農書全集』が農文協から刊行が開始された。この時期が，石油ショックを契機として減速経済にむかうわが国で，伝統的農業や有機農法の再評価が始まった時期と重なり合うのは，単なる偶然ではあるまい。

2

本書は大きく近世農書を研究するための方法論を論じた第Ⅰ部「近世農書の地理学的研究序説」と，個別農書などを素材とした第Ⅱ部「近世農書からみた地域性の考察」の2部構成をとる。本書の大部分は，これまで氏が地理学の専門雑誌や大学の紀要等に発表してきたものに，加筆修正を行なって1冊の本にまとめたものである。発表の順序としては，後者が先に出来上がったのであるが，ここでは章立ての順序にしたがって紹介しよう。



第1章「農書について」では，農書を「家すなわち農業経営単位レベルで実践可能な，在来のものより進んだ耕作ならびに経営の技術を普及させるためか記録する目的で著された農業技術書」（6ページ）と定義したのち，1）農書の記述の指標，2）記述する内容，3）記述地域，4）著者の属する階層と著作目的などによって分類する。1）では，わが国の農書が，農作物の種類，農暦，土性のいずれか，またはこれらを組み合わせた構成で著述されているのを特色とする。特に，中国農書にない土性を指標にしたわが国農書の独自性を，記述するスケールの相違によるとする見解は，けだし卓見である。2）では，

農事全般にわたる総合農書と，農具，養蚕，綿作のようなある部門だけを扱った，専門農書に分ける。3）は，広範囲の読者を対象とした全国的農書と，限られた狭い範囲について言及した地域的農書に分け，後者にわが国の特色があるとする。4）で先学の分類を斟酌しながら，「学者の農書」，「百姓の農書」，「指導的農書」，「地方的農書」などを紹介している。氏が後半部で考察を加えている農書は，この範疇からいえば，すべて記述範囲の狭い総合的農書で，読者を百姓に想定した「百姓の農書」，「地方的農書」である。この限定こそが，氏のいう「地理学的視点」につながる。さらに，地方別に農書の成立年代や分布の粗密を検討し，最も人口に膾炙した『農業全書』の後発農書への影響についても考察を加える。

第2章「日本農書の性格」では，『呂氏春秋』以来の中国農書や農業革命期のイギリス農書との比較を通じて，近世日本農書の特色として，言及範囲のスケールが小さいこと，官撰農書が存在しないこと，個々の農家レベルで実践可能な既存耕地の高度利用技術を伝える目的に限定して著作されたため，労働力さえ注ぎこめば実現可能な技術体系であったことなどを抽出している。

第3章「近世農書の地理学的研究法」では，筆者自らの研究目的を，狭義には，農書のフィールドになった地域の耕地利用方式，およびそれが地表に投影された農業景観の復原とそれを通しての当該地域の性格の究明に求める。その実現に向かって，氏は300種以上といわれる既刊農書の中から地域の性格を明らかにできるものだけに分析対象を限定する。1）著者が長年の営農経験を有すること，2）言及する地域が明らかなこと，3）その地域への普及を目的とするか，普及が可能なこと，4）農作物の耕作法を記述していること，の4点がその限定である。

具体的な分析の手続きとしては，耕作暦からその地域の基本的農法を理解し，他地域との比較をしようとするところに本書の最大の特色があり，これは第Ⅱ部の各論でも終始一貫している。それは，この部分が農書の記述の中で最も保守的，かつ普遍性をもつからとする。「一経営単位（農家）が実施した複数の農作物の作付順序は，一時点における農作物の作付配分に等しいので，前後作

として時系列上で結合する農作物は，同時に空間上でも結合し，作付体系を形成する」(80ページ）としたうえで，耕地の種類（地目）別の作付カレンダーを作成し，これによって当時の農業景観のイメージが構築可能とする。

第Ⅱ部では大きく東北日本の農書，中央日本の農書，西南日本の農書に便宜的に分けながら，『会津農書』(会津盆地)，『耕作噺』(津軽平野)，『軽邑耕作鈔』(津軽・九戸郡)，『耕稼春秋』(金沢平野)，『農業日用集』(三河・豊川下流域)，『農具揃』(飛騨・古川)，『清良記』(伊予・三間)，『老農類語』(対馬)，『家業考』(安芸・高田郡）にみられる耕作法を検討する（第1章～3章)。どの農書の場合でも，耕作暦の作成と他地域との比較や，その地域の現代農業との関連性，特殊な農業技術（人力すき，焼土製造法など）を聴きとりなどで補いながら，当時の耕作法を詳細に復原しようとする姿勢，などが共通する。

第4章では，水稲・畑作物の耕作暦を全国の農書から比較を試みている。水稲については，総作付日数の長い東北地方と短い他の地域に大別したあと，播種始日と苗代期間で下位区分して，全国を4区分する。また，畑作物は地域性が少ないことを指摘している。

第5章は史料を農事記録に求め，農書との長所・短所を比較しようとする。対象地域としては，薩摩・大隅と備後国芦田川下流域を選び，農家の作付体系を検討している。

3

以上が粗雑ながら本書の概要であるが，残された紙数で二，三の観点からコメントを加えてみたい。

第1点は，農書の研究資料としての価値と限界についてである。わが国の近世の識字率は当時の世界的な水準からみて，トップクラスにあったことは間違いない。かといって，当時の農民すべてが農書を理解でき，その技術をただちに実践できたとはいえない。しかも農書は村方支配の客観的資料となる検地帳・村明細帳・宗門改帳などと異なって，著者の問題意識や構成力が大きく内容の

取捨選択に反映した「読物」・「書物」であって，「記録」ではない。代々の子孫に伝えようとしたかなり家伝的性格の強い農書であっても，現実に行われている農業技術を細大洩らさずに記録したものではない。そこに何らかの規範が存在していることは否定できない。ましてや，『農業全書』や『綿圃要務』のような広域に流布し，しかも広域に適合する技術を説いた「広域的農書」，あるいは佐藤信淵のような営農経験がない「学者の農書」はよりこの規範性が高いことは当然である。しかし評者が主張したいのは，有薗氏が「地域の性格を究明できる」とする農書も，多かれ少なかれ規範性をもつ点である。それは，少なくとも，個別農家の農事記録・農家経営記録である農事日誌などよりは高いといえよう。そこにおのずと農書から得られる情報の偏りと，説明できる事象の限界が存在する。品種選択などはかなり農民の行動の表象といえるものではあるが，農書には通り一辺の説明しかでてこない。現実の農地にどのように作付けされたかを，農事記録から分布図として落としてみて初めてそのパターンがわかる性格のものではないだろうか。

それに関連して付言すれば，農事記録の類の多くが上層階層によって著されており，資本と労働力を持たない一般農家では行えない技術が含まれているため，その地域の典型になり得ないとする論理（67～68ページ，290～291ページ）は，この記録のなかに，農業技術を読み取ろうとする立場と，農家経営を議論する立場の違いであって，前者はわれわれにとって，現実の地表への投影という点から貴重な情報を提供してくれるものと思われる。

農書は一般的にいって，量的基準が他の村方文書に比べて少ないし，当該地域の平均的な数字である。また，個人の統御の範囲を越えたものとして，水管理がほとんど無視されているのを特色とする。このような制約のなかで，有薗氏はどの農書にも頻出する比較可能な指標として，耕作暦に着目する。しかし，そのことによって，もっと多様な分析が可能な史料を，やや矮小化してしまったのではないだろうか。作物の種類といういちばん単純な指標は，意図的な取捨選択が著者に働くとしても，それをどの順序で作付けるかという問題となると，そこには一つの体系が存在すると仮定して分析を進めるのが，普通の姿勢

と思われる。また，肥培管理はこれまでの農書の研究では，比較的よくとりあげられてきた指標といえるが，この本ではほとんどそれが欠如してしまっている。氏のような地域的視点から扱えば，東北日本―西南日本，あるいは近世を大きく2～3に区分してその発展差をみるような従来の方法に反省を促すことができたのではないだろうか。惜しまれる点といえる。

第2の点は，この書物のキーワードともいうべき耕作暦についてである。まず，形式面からいえば，第Ⅱ部のすべての章節で登場する，各地の農書と当該地域の農書を史料とした，播種・田植え・収穫などの作業適期の比較図がある。これらは既往の論文を下敷きにしているため，その比較にやや重複が多いのは惜しまれる。それと細かなことであるが，月を遡るような印象を与えかねない図中の左向きの矢印は，再考された方がいいように思われる。

内容上問題となる点は，その農書に著された耕作暦が何によって決定されているかということの説明がほとんどなく，図に表れた数字の記述に終始していることである。そしていきなり，第4章で全国の耕作暦を分布論的に扱っているが，この間にはかなりの飛躍があるのではないだろうか。耕作暦自体は，私見によれば，きわめて気候的要素がきいている指標である。農書の分布との対応をみるのならばそのスケールは10^4㎢以上は必要であろう。一方，有薗氏が地域的考察をしているスケールはせいぜい10^0～10^2㎢で，そこでは地形・土壌などの要素が支配的である。そこでもし気候的要素の強い耕作暦との整合性を図ろうとすれば，確かに外挿的手段（他地域との比較）に依らなければならないかもしれない。せっかくの「関係の学」としての地理学を重視しようとする立場をとられているのであるから，農書以外の資料でもって，その地域に生起する農業技術の説明がもう少し欲しかったと思うのである。

また耕作暦は，土地利用方式の時間の経過にしたがって記載するものであるから，たしかに氏がいうような一種の農業景観の復原になる。しかしここで意味する景観は，条里景観という場合の現実の地表上の景観ではなく，農書の著者がイメージするその地域の平均的状態を示したもので，そのことは有薗氏も十分承知されて非常に慎重な用語法をされている。しかし一般的な読者には，

ややなじみの薄い，違和感を覚える使い方ではないかと懸念する。

第3の点は，この著書の大きな特長にもなっている現代農業との連続性の問題である。それは『日本農書全集』の伝統農業の知恵から現代農業に生かせるものを汲み取ろうとする刊行意図に，何か相通じるものさえ感じる。これまで史学畑の人々が見落としていた重要な視点だと思う。しかし，近世農業と高度経済成長期直前まで行われていた農業を何の中間項を設けることなく，比較するのはいかがなものであろうか。一例をあげよう。この期間には，全国的な傾向として，日本農業は養蚕の急激な普及と衰退を経験しており，それが農業経営レベルからも他の農作物の栽培に少なからざる影響を与えている。

その意味からも，今後の本研究の発展の可能性として，明治・大正期の農業書の本格的な分析や，農業教育の制度化と普及の問題は避けて通れないのではないかと思われる。また，地主制や村落共同体，商品農業の発展という，これまで日本の農村史研究が営々として積み上げてきた枠組みのなかで，農書の果たした役割や，その技術の意義を考えるという基礎作業も必要になってくるのではないだろうか。

それとともに，全国農書の農業技術の要素を基本単位としたデーターベースを作成して地域別検討をより深化させることも，今後の課題となり得ると私は考えている。いろいろないものねだりをしたが，本格的な農書研究が時期を得て江湖にでたことを心から喜ぶ者として，失礼なことも書かせていただいた。妄言多謝。

〈古今書院，1986年，4,400円〉